

マリー・アントワネットの ヴェルサイユ

マリー・アントワネットは褒めそやされ或いは嫌われながらも、人々の心を魅了し続ける。ヴェルサイユに君臨したといえる唯一の王妃であり、拘束、退屈、贅沢、娯楽、悪評、そして革命初期の動揺をそこで体験した。

王太子妃として1770年5月に宮殿に到着し、1789年10月に強制退去させられるまで、ヴェルサイユを自分の観念像通りに形成していった。服飾と周囲を取り巻く前ロマン主義に関心を持ち、さらに極端な浪費家であった王妃は、当時の優れた芸術家の助けを得て、肩の凝らないしかし豪華なライフアートを創造した。

ヴェルサイユ。フランスの最も偉大な王ルイ14世が建設した、ヨーロッパで最も美しい宮殿。マリー・アントワネット。フランス史で最も有名な王妃。盛大、豪華、贅沢の限りを満喫した唯一の王妃であり、人望のなさ、陰悪、政治動乱を極限まで体験した唯一の女性でもある。革命は彼女を裁き、人目をひく、しかし平等のための死刑宣告を下した。ヴェルサイユとマリー・アントワネットは、切り離して考えることはできない。宮殿の空間に残る王妃の強い意向の痕跡は、宮廷人にも国王にも確固とした拘束を課す規則に従って絶対君主政治が演出された壮麗な部屋ではなく、王妃が凝った女性的な私生活様式を創り上げた居殿に明白である。マリー・アントワネットは、単に費用のかかるくだらない趣味で頭がいつぱいの流行を追う王妃であっただけではない。おそらく無意識のうちに「母性愛」や人々に対し好意的な「飾り家のない母」など新しい想念に影響されて、子供達の教育や、宮殿から徒歩20分ほどにあるお気に入りの別荘、小トリアノン建設に力を注いだのであろう。フランス国王子息たちの母である王妃の王室における日常は、辛いしきたりに服従させられるヴェルサイユの公式儀典をみれば理解が深まるであろう。同様に、マリー・アントワネットが導入した肩の凝らない生活は、ヴェルサイユと小トリアノンの美的で繊細な側面に最も明白に現れている。